鈴の鳴る人

第一部

水上勉

鈴の鳴る人

水上勉

毎日新聞社

鈴の鳴る人第一部　著者水上勉　定価五百八
十円　編集人浜田琉司　発行人朝居正彦　発
行所毎日新聞社　印刷所大日本印刷　製本所
佐久間製本　昭和四十七年六月三十日第一刷
昭和四十七年九月三十日第二刷
©水上勉
一九七二〈検印省略〉
0093-400062-7904

鈴の鳴る人〈第一部〉目次

第一章　鴉がさわぐ日に、布施要造が殺されること……六
第二章　布施喬が吉林丸で大連へ向うこと
また、猿柿にて葬式がとり行なわれること……二三
第三章　布施喬が吉林丸船上で娼妓田代かよを識ること……四二
第四章　紺野巡査部長が京都府下へ潜行すること……六〇
第五章　布施喬、大連逢坂町に登楼のこと……七七
第六章　布施喬は大連から奉天に赴任すること……九五
第七章　なぜ、こんなに奉天は淋しいのか……一一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八章　帰りなん、いざ在所へ
布施喬が父の死に青ざめること……一三三
第九章　老いたる苦力（クーリー）が豚一頭のために殺されること
さらに、紺野六太郎が思案にくれること……一五一
第十章　戦場での人殺しは勲功になり
銃後では罪人となること……一七五
第十一章　喬が「さいだま家」で田代かよと軀を温めあうこと……一八七
第十二章　布施喬が澄江に会うこと
若狭本郷に帰って義母と同居すること……二二四
第十三章　喬は丙種合格となり、徹に召集令がくること……二五五

装幀　永田　力

鈴の鳴る人〈第一部〉

第一章　鴉がさわぐ日に、布施要造が殺されること

1

日暮れの谷へ鴉がむれて落ちてくる。あかね色の天の下は、刈り終えたばかりの水田と種子を撒き終えた畑が、あたかも二種類の莚を敷きのべたように、橙色に染めあげられていた。鴉は時にはそれらの田や畑へ降りて餌を漁って、すぐまた空へ、舞いあがり、背山の黒い松や杉や山桃の密生した襞へ吸われた。そこに彼らの巣があった。日によっては一羽も姿を見せぬことがあるのに、この日は、三、四十羽ぐらいが群れをなして啼き騒いだ。こんな日は、猿柿集落の人たちは戸を締めて早く眠った。冬近い、陽蔭村の落日は淋しかったのである。

布施要造が、中型黒塗りのダットサンを走らせて、高台の家へたどりついた時刻は六時すぎていた。谷の奥だったので暗くなりかけていた。四方に瓦屋根のシコロをめぐらせた茅ぶき大屋根の豪華な本屋の煙ぬきから、乳いろの煙が出て山へ溶けている。妻のいとが玄関に迎え、駅前ハイヤー（にしては粗末な古車だったが）の運転手の佐川に、いつもお世話さまでございます、と夫にかわって礼をのべ、佐川が柿の木のある玄関前の庭で、バックギアに入れかえ、巧妙に車を廻して去るのを見とどけてから、要造に尾いて家へ入った。

「喬がきたじゃろ」

要造がきいた。いとは、夫を見あげて、

「いいえ」

といった。要造は握りの太いステッキを戸口の壁にもたらせて、新調したばかりの黒皮靴をぬぎながら、

「おかしいな、駅前で見たもんがおる」

といった。いとは心もち眉根にかげりをみせたが、

「もどってきませんよ。おかしいですのう。誰に聞きなあったですか」

ときかえした。要造は誰に聞いたともいわず、いとをちょっとふりかえっただけで、下ぶくれの脂ぎった顔を一瞬ではあったが、不機嫌にゆがめ、

「どこぞで酒でも喰ろうとんじゃろ。阿呆めが……」

といって居間へあがった。言葉は憎々しげだった。が、これは持ち前で、いとには、要造が子に会いたがっている気配が感じられた。

「それなら、もどってきておいでるでしょう」
夫について居間へあがった。要造は合オーバーをぬいで自分で奥の壁の衣紋掛にかけると、服のまま炉端にすわった。飯はすませてきたから、風呂に入る、といった。いとは、すぐ裏へ出て、外焚き釜のフタをあけ、ひっかき棒で燠をまぜかえしておいて、浴室へもどって湯槽に手を入れ、湯加減をみた。長州風呂である。加減がよかったので、いとは、タオルと石鹸に浴衣と袷をととのえ、
「どうぞ」
といった。要造は居間で服をぬいでいた。褌姿になると、六十二歳の出っ腹が、黒い臍の穴を凹ませてとび出ている。浴室横の小便所でその腹を前へつきだすようにして放尿してから、戸をあけたまま浴室へ入った。べつだん、この態度も常とかわりがない。汽車で四時間はかかる京都から、三男坊の喬が帰郷していた姿をみた者がいたことについてはこれ以上、いとにはいわず、くせのあーッと大息をついて入浴する音をたてて、かなりゆっくり入っていた。浴室から出てくると、調べものがあるといって、奥座敷へ入ったまま出てこなくなった。机にむかうと、ひきよせた鞄から書類を出し、熱心に何かを読んでいる。いとは茶をもっていったが、要造はふりむかなかった。十時になっても、村の人が駅前でみたという喬は顔をみせなかった。いとは一人だけの食事をすませて、湯に入った。その頃から風が出ている。山が近いので、密生した樹のさわぐ音と、裏側にあたる浜の波をうけてとどろく山の音が、床のたかいこの家を轟々とゆるがせた。集落から少しはなれた一軒家だから、それだけ風あたりがつよく戸をゆさぶるのだった。いとは、湯からあがると、戸締りをどうしようか、と思ったが、こんな時間になっても、喬が帰ってこないのなら、夫のきいたという喬の帰郷云々は、人まちがいではなかったかと思われた。帰っているものなら、もう家へ顔をあらわすだろう。表へ出て、庭と段下の細い畷を望み、人影のないのをたしかめてから家へ入った。いとが、外を見た時、暗い谷間の左手には点々と六十戸の集落の灯が明滅していたのと、段の上に密生した常緑木と、枇杷の木が、大きく葉をゆるがせていただけである。
「喬は帰らないようですから、寝てもよろしいかのう」
いとは、奥座敷の敷居際から要造に訊いた。
「うむ」
と要造はこたえた。この返事にも、喬の帰郷にこだわっているひびきは感じられなかった。夫も、三男坊の帰郷は、いまは信じていないのかもしれぬ、といとは思った。で、あらためて戸締りをみて寝所に入ったが、なかなか眠れそうにもないので、三十分ほどしてまた起きあがると、いとは、表の大戸だけ鍵をはずしてきた。喬がおそくもどってきても、大声でよんで起さずにすむよう慮ったのである。鍵をはずしてきたことで、いとはすぐに眠れた。十一時が打った。
いとが、生きている要造をみたのは、つまり就寝前に、この奥座敷をのぞいて、寝てもよろしいかと訊ねた時である。

夫は机に向って、スタンドをひきよせ、ロイド眼鏡をかけたはげ頭の横顔を影絵のように浮かせて書類をめくっていた。短い首をちぢめたその姿は、いとには数年見なれたうしろ姿だった。これが、最期になろうなどとは想像だにしていない。

風が荒れての大きな音だったか、夫が、いとの敷きのべた蒲団へ入るべく、小便に立って、キシミ戸をあけたてした時の音だったか、とにかく、夢うつつの中で、かなり大きな音がしているのは感じたが、朝は六時に起き、田仕事はもちろん、何かと内仕事に忙殺されているので、いとは疲れてもいた。激しい音をうつつの中で聞きつつ熟睡していた。眼をさましたのは朝である。風はやんでいた。うす明りが、戸袋のスキマから、いとの孤独な寝所へ矢のようにさしているのがわかった。いとは柱時計が六時を打つのをきき、ふと、障子向うの座敷のスタンドがつけたままになっている様子なので、夫は徹夜をしたのではないかと不審な感じを抱いたので、蒲団を出て、障子をあけ、座敷の方をみてびっくりしている。

夫はいなかった。床が昨夜のべたままである。それは一見して、夫がそこで寝なかったことを現していた。夜のうちにどこかへ出たのだろうか。電燈もつけ放しなのが不審だったので、いとは、居間へもどり、土間へ降りて、井戸の方へまわる裏戸をあけて、息を呑んだ。三尺ばかりのたたきがある。そこに、要造はうつ伏せになって倒れていたのだ。あっといとは声をあげた。

いとは、近づいた。要造の、耳下から首にかけて大きな穴があいており、そこからあふれ出たらしい血が、たたきと地面にぬめり出ている。両手と顔を地面へへばりつかせて動かない。要造は物をいわなかった。いとは何かいおうとしたけれども声が出ず、へたへたとそこへ気を失いそうになってしゃがんだ。どうして、そこから自分の足をうごかして、表へ走り出て、一反歩の桑畑をへだてた隣家の長七郎の家へかけ込んだか、あとになっても思いだせない。長七郎と妻のかなに、

「うちの人が、うちの人が」

といって狂乱のように叫んで土間へへたりこんで気を失っている。

2

駅から、猿柿の集落までは、一里半ある。駅は「若狭本郷」といい、帯のように細く近江境へえぐれる谷の川下である。谷奥の集落へは、川ぞいの一本道を登ってゆくわけだが、猿柿の集落は、車なら十分、自転車なら三十分の距離である。むかし、といっても六年ほど前まで県会議員をつとめもし、若狭一円に名を馳せた山師として素封家でもある布施要造の死は、谷間の人びとを蒼ざめさせたことはいうまでもなかった。あきらかに殺人と思われたからである。誰かが、部屋から要造をよびだして裏口でいさかい、鋭利な刃物で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

要造の咽喉首をひと突きに殺して、逃亡している。駅のある村に「警部補派出所」があった。ここには警部補と巡査がいた。巡査は派出所の奥の六畳に寝ていて、警部補は浜に近い漁師の家の離れを借りていた。まだ、この当時は、猿柿に電話はなかった。長七郎が自転車で、派出所に知らせたのが七時すぎ、滝内貞吉巡査が、自転車で上司の島本警部補を浜の家へ起こしに行ったのが十分後。そこで、二つ駅向うの高浜町の警部派出所と小浜町警察に電話でしらせ、まだ睡気ののこっているような顔の数人の警官たちが、ぎょろついた眼をして、自転車で馳けつけたのは、八時すぎていたと思う。猿柿集落の連中は黒山にたかって、もう布施家を取りまいていた。

これはあとで問題になることだが、現場の情況から一見して、他殺であることは瀝然としていたので、高浜町からきた海堂警部が指揮をとって厳重な現場保存と、鑑識係の調査が行なわれた。もちろん、いとの陳述もすぐに聴取される。前夜、十一時頃以降に、誰かが布施家へ入りこみ、仕事をしていた要造を裏口へよび出して殺して逃げたとしか考えられない。いとは寝ていて気づかなかった。風のつよい夜だったのと、犯行がきわめて巧みで、ひとつきで咽喉をさし、のめったところを見とどけてから風音にまぎれて逃げたとみるしかなかった。警官たちは、奥座敷、居間、土間にわたって、犯人が歩いたと思われる足跡、手をかけたとみられる戸障子にのこされた指紋、さらにどこかに捨てられているにちがいない凶器（かなり鋭利な出刃か鎌と推断される）の発見に、村人や、消防隊まで動員して探したが、肝心の凶器は附近のどこからも出てこず、戸障子の指紋も、歩いたと思われる居間、土間の足跡も、それが犯人のものかどうか不鮮明な結果をみたのは、まだ、この当時、このような殺人事件の起きたこともなかった平和な猿柿の人びとが、好奇心から手不足でもある警官を手つだって、そこらじゅうを右往左往してしまったからである。現場保存ということが、こういう事件の場合警官のまず気をつけねばならぬ肝要事であるのに、動顚していたために、不手際が生じている。

海堂警部は、発見者でもあり、妻でもあり、当夜は被害者以外に、この家に一人しかいなかったいとから先ずくわしいことを聴取したが、その日夕刻に帰ってきた布施要造が、三男の喬が村に帰っているらしいことを駅前で誰かからきいたと、ハイヤーを降りて、佐川運転手が帰ったあとすぐもらしたことに疑惑をもった。当然、子の喬をさがすことが、捜査の糸口となった。

「喬さんちゅうと、何ばんめの息子さんじゃ」

警部はいとに聞いた。

「三ばんめの子です」

といとはこたえた。

「お母さんは、いったん戸に鍵をかけて寝たが、寝つかれなかったで、また鍵をはずしにいったんだね」

「はえ……そうです。喬さんは、わたしの生んだ子ではあり

ません。わたしは、後妻ですから」
　といとはふるえ声でいった。わきから派出所の島本が、
「ちょっと複雑な家でね……最初の奥さんが長男をうんで亡くなられ、その次にまた奥さんを貰われて、次男が生まれました。またその奥さんが死亡して三ばんめの奥さんを貰ったのはそれから間なしでしたが……そのひとも喬くんを生むと……縊死しました……十数年前に、前任者の田代巡査部長が事件を処理していますが、わたしも立会ったのでよくおぼえています……いとさんは、つまり、四ばんめの奥さんということになります」
　海堂警部は赤ら顔をこわばらせながらきいていたが、いとの方をみて、
「いとさんには、お子さんはないのですか」
「わたしには……どざりません」
　といとはふるえ声でこたえた。なるほど複雑な家だといえた。腹ちがいの子が三人いて、この日、京都にいるはずの三男の喬が、村へもどってきて、深夜に襲ったのだろうか。
　父親の要造は、誰かに喬が帰っていたことをきいている事実からすると、当然三男が怪しくなる。喬の追跡が先ず肝要だろう。三どめの妻の子であり、しかもその母は首を吊って死んでいるというのである。
「長男の方はどこにおられるんですか」
「大阪です。徹さんといいます」
　いとがこたえた。
「次男は」
「小浜ですねや」
「三男の喬くんは、京都におられたってわけですね」
「はえ……」
　大阪へは当時汽車で五時間かかる距離である。京都へは四時間、小浜は三つ駅向うの城下町で汽車なら二十分だった。三人の息子らは、この三地方に散っていて、事件前日に、京都の喬だけが、村へもどっていた。調べてみねば、わからないことながら、とにかく、喬をみた者がいたとするなら先ずそこから糸がたぐれよう。皆はこう考えた。
　高浜警部派出所の海堂も、本郷派出所の島本も、それから他の警官も、いちように喬の追求しかないと考えた。いとは四ばんめの妻であり、発見者でもあるが、ただ一人、兇行時に、居間をへだてた約三間向うの障子境いの寝所で眠っていた。大きな音も叫び声もきかずに……これは、第三者の証明によったものでない。本人の供述を信じてのことであったから、いとも調べてゆきながら、喬を追求すべきである。
「喬くんはいくつでしたか」
「十九です」
　いとはこたえた。警部補の眼がいらだちと鋭さを加えてくるのにいとは怯えをみせた。
「京都で何をしているんですか」
「大学の夜間部に通っておりなったですが、ひるは、府庁につとめています」

「府庁で……何をしとんのかね」
島本がいくらかぞんざいな聞き方に変った。
「府庁の雇しとんなあって、去年から義勇軍の募集係してなると……ききました」
「義勇軍ちゅうと、満蒙開拓のかね」
「はえ」
島本が首をかしげつつエンピツを嘗めてノートに記した。
「昨日……村へもどっとりなるのを見たと要造さんがいったなら……どこかで誰かが会うたとみてよいはずじゃが、家には顔を見せなかったんだね」
「はえ」
海堂警部は、終始慎重な顔でノートに記録していた。心に残るのは、喬という三男の母が、数年前に縊死していることであった。布施要造が次々と妻に死なれて、それぞれ、腹ちがいの子を三人もち、これらの子の誰をも、家に置かず、四ばんめの妻のいとを迎えて孤独に暮していた事情は、尋常ではない。この家の暗い一面を覗かせないでもない。死体を棺にいれて、警官の一行が、それをリヤカーに積み、やがて、設置さるべき「布施要造殺人事件本部」の高浜警部派出所へひきあげていったのは、午ちかかった。不思議なことだった。駅前の村をたずね歩いても三男坊の喬は前日、村へ帰っていたという情報はどこにもなかった。
つまり、三人の子らの誰もが村へもどっていなくて、身内の者としてはいとだけが死体から約七間はなれた部屋に寝ていたのである。
昭和十五年十月二十九日のことであった。猿柿集落の背山には、この日も鴉が啼いていた。その中の一羽は炭の破片のような漆黒な翼をひろげて、布施家の巨大な棟瓦にとまって剣製のようにうごかなかった。死臭を求めて歓喜するのか、あとからあとから降りてくる鴉は、数十羽もおり、一日じゅう西谷の、葉の落ちた欅林にかさぶたみたいにとまっていた。昭和十五年といえば、いまから三十二年前である。地元新聞はもちろん、中央紙の福井版にも、この事件は詳細に報じられたので、記憶する人も、まだ読者中におられるかも知れない。福井県大飯郡本郷村字猿柿での出来事である。

3

咽喉を大きくえぐられて死んでいた被害者が、たとえば凶器である出刃とか鎌をわきにおいていて、それから被害者以外の指紋しか出なかったとすれば、自殺説もなりたつ現場であった（事実、捜査が壁にぶち当った際、被害者の性格、日頃の異状性を考えて自殺説さえ出たほどだ）。ところが肝心の凶器は現場はもちろん家のまわりからも、消防団が三日がかりでさがした近くの山や田や畑にもなかった。となると、犯人がどこか遠くへ、つまり猿柿集落から距った海岸とか、海中とか、谷の中央を流れる佐分利川へ、捨てるか埋めて逃げたとしか考えられない。他殺の根拠は完全である。前述したように、陰惨な人殺しなど明治以降一どとて起きたことのな

かった平和な村であった。

本郷村派出所は、大あわてにあわてたし、今日のように科学捜査や警察犬など駆使して、敏速適確に現場から犯人を嗅ぎ出してみせる機能に欠けてもいた点は否めないにしても、小浜、高浜から、応援警官がきて、警部が陣頭指揮しても一人の重要容疑者を推定し得るだけで、この事件は迷宮に入った。真に、これを迷宮といえたかどうか。この谷一帯を管轄する責任のあった島本仁兵衛警部補は、海堂警部に怒鳴られながら、事件究明に走りまわったのだが。

第一容疑者は三男喬であった。布施要造が二十八日の夕刻、本郷駅前のハイヤー会社の佐川に運転されて、猿柿の家へ着いた時、佐川がバックしてからギヤを入れかえ、エンジンをふかして村しもへ消えた直後、要造は、妻のいとに、〈喬がきたじゃろ〉といい、いとが、いいえ、とこたえると、〈おかしいな、駅前で見たもんがおる〉心もち眉根にかげりをうかべていったことが、その根拠である。

いとは、この時、小浜中学を卒業後、村を出て京都に下宿し、府庁につとめて、満蒙開拓義勇軍の募集係をやりながら、夜は立命館大学へ通っている喬の顔を思いだした。腹をいためた子ではないが、長男の徹、次男の啓にくらべると気だてもよく、帰っても、いとに手土産を欠かしたことがない。父親からそう援助もうけていないのに、身綺麗で明るかった喬には、子らの中でいちばん好意をもっていたから、駅前で見かけた人がいるなら、夫とひと足ちがいでもどってくるとばかり思い、夫が風呂をすまして、座敷へ入って仕事をはじめても、自分だけはせめて喬と一しょにと思って、食事も待った。ところが十一時すぎても帰ってこないし、夫が誰から喬が帰っていることをきいたのやら、問うてみても夫はだまって、不機嫌に黙殺した。〈どこぞで酒でも喰ろとんのじゃろ〉喬に対して要造は日頃から憎悪といってもよいほどの、悪感情をもっていた。大阪の徹や、小浜の啓に対するのとちがって、毛虫のように嫌った理由も、母親が首を吊って死んだという、つまり村じゅうに恥をかいたという過去があるからであった。いとには、子供に罪はないと思えても、要造は口に出して、この喬母子を罵っている……。いとは、そんなこともあるから、村へ帰ってきているなら喬は、よし駅前で酒を呑んで、時間つぶししても、父が寝てから、しずかに戸をたたいて、いとにだけ笑顔をみせに帰るのではないか、と思いもしたので、いったん鍵をかけて寝たのに、また起き出て、夫に知れぬようひそかに鍵をはずして寝床へ入っている。警官はこの述懐を信じた。

島本仁兵衛は、隣家へかけこんで腰をぬかし、当初はおろおろして物もいえぬほど蒼ざめていたいとが、顔だちも美しく、後妻にしては色も白く、どこかに苦労の翳りはみえるが、誠実らしい眼つきと、おとなしい気だてなのに、この女が、夫殺しの大罪を犯すことは九分九厘あるまいと確信はもった。そのことは、猿柿一帯の聞込みからも裏付けられた。いとは要造が先立たれた三人の妻の、誰よりも人づきあいは

よく、律義で、裏腹のない日頃であった。無理に瑕瑾をさがすとすれば、親許が隣集落の万願寺であり、ずいぶんそこは貧家だったので、十四歳で京都に奉公し、その奉公先の主人に見込まれて、主家の後添えになっているが、その主人の急死で、三十三歳で後家となり、万願寺に帰った。器量がよく、気立てもよい評判から、世話する人があって、布施家の四どめに入ったのである。この過去の薄幸さがそれだといえたかもしれぬが、こんなことで、いとに犯行の動機を求めることは出来ない。

島本仁兵衛は、布施家には、いとしか残っていないのだし、また、先妻三人、長男徹、次男啓、三男喬のことなどについて、いとが誰よりもくわしく知っていることでもあるから、捜査の協力者として毎日のように訪ねて、聞込みをかさねた。布施要造が県会議員をつとめていた頃の公的生活、やめてから、製材所や山買いをやっていた仕事の内情。いととの孤独な生活、さらに、帰省してくる三人の子らと要造の対し方、山林二町歩、水田七反、桑、茶、菜園など、山畑一反。猿柿では一等の地主であり、佐分利谷じゅうでも財産家に入る格式で、村民に推されて多少は本人もやってみたい気があって県会議員も一期つとめ、四十代のはじめに、祖父母をつづけさまに結核で失ない、三人の妻にも死なれた。とりわけ、うち一人は縊死という（原因は本人の神経衰弱だと要造はいった）、家庭運のわるさからくる、暗い翳りを時には、肥った赧ら顔の眼にちらつかせることもあったらしいが、六十三歳ではまだ早死だろう。遺産相続なども、いったい、要造は、腹のちがう子のうち、誰に、どのように譲渡しようと決めていたか。それも未決定だった様子だし、かりに喬だけが母の縊死で特別視されていたにしても、長男、次男にそれでは、どう対していたか。

島本仁兵衛は、複雑な布施家のこみ入った事情を調べて、ノートが二冊になった。しかし、いとの何一つ主観をさし入れずに語ってくれる説明から、どう推理しても、三男喬への疑惑はふかまるばかりだった。当人が犯行のあった日に、帰郷していた形跡があったからだ。

島本は、海堂警部に、容疑者第一号として布施喬を追求する旨を報告し、あらためて、事件前日に、被害者がもらした〈駅前できいた〉というひと言を重視して、徹底的に洗いなおした。部下の巡査三名を、本郷、加斗、和田と、近辺の駅のある村一帯へ聞込ませた。不思議なことに、布施要造に、〈お宅の喬さんがもどっとりなさるのを見かけた〉と教えた者にめぐりあえなかった。巡査たちは首をかしげてこもごもにいった。

「駅前できいたちゅうて、酒でも喰ろうとんじゃろとにくまれ口たたいてたのやから、喬は本郷へもどっておったにちがいありません。ところが、誰かにみつけられた形跡はないんですよ……」

本郷駅前の床屋、料理屋、ミルクホール、旅館、医者、雑貨屋、通り一帯の人びとにきいても、喬に似た男をみた者は

いなかった。それでは布施要造は、誰からきいたのだろう。ハイヤーに乗ったのは五時すぎていたから、四時五十九分の上りで要造は駅に降り（その日は朝九時発の汽車で小浜へ行っていた）、降りた時に、一しょになった誰かからきいたにちがいない。佐川運転手のはなしだと、要造はひとりで、いつものように〈おいたのむで〉と入ってきて、佐川が古タイヤを裏の物置きへしまって、出てきた時に鉢あわせしている。わきに誰もいず、同列車で降りた者は十数名ばかり、もう先を家路へ向っていた。佐川は、ダットサンを車庫から出し、駅前道から村のアスファルトをスピードだして谷へ向ったけれど、途中で列車を降りた者の姿はみたが、通勤客の帰る便ではないから猿柿へ上る人もなかったといっている。要造はこの十人足らずの誰かから、喬をみたと教わっていなければ、べつのどこかできいていたとみるしかない。べつの所、それは、朝九時に小浜町へ出ているから、聞込み班は、本郷村での喬を断念し、すぐ小浜へとんだ。そして要造がその日九時から歩いた先を虱つぶしに追跡した。

布施要造は、九時十分に小浜駅を降りて（本郷駅を八時五十二分に出ている）、駅に近い川ぶち町の地方事務所へ寄り、ここで鶴川萬吉視学に会って、約一時間「学徒による出征留守家庭の山林勤労動員試案」、「小浜線高浜青郷間国鉄線路空地活用の馬鈴薯植付計画」につき、低学年児童動員に反対する父兄の出ている投書など視学からみせられ、約一時間雑談して、十一時半頃、安西小浜製材所へゆき、社長の安西清兵衛と、安西の車で駅裏の貯木場を兼ねた事務所から、後瀬山下の青濱館に昼食、これが約二時間、話の内容は布施の持山である猿柿谷のオオツロの松約一町歩を軍需動員第三回供出用材に伐採することを決め、青濱館を出て、駅前運送の寺上甚市にあい、寺上の請求金の十二円五十銭を支払い、二時すぎ、次男啓のつとめている浜の漁業組合へ顔をみせた。啓が不在だったので、徒歩で、石井漁業へゆき、フグの養殖を双児島附近に申請中の石井と雑談して約四十分ほどして、駅の方へ向って歩いていった。そのあと目撃者はないのである。この時刻は、三時そこそこなので、四時二十分発の上りまでの時間、約一時間二十分を要造はどこで費したか不明であった。この際巡査たちは次男啓の西津の菜園場の一軒家をたずねた。啓には新婚半年目の妻がいた。刑事のいった時は啓は漁業組合にいて、細君にきくと二十八日に義父はこなかったという。刑事は漁業組合へいってまた啓にきいたが、会っていない、と啓はいった。これでは、要造が、三男喬のもどったことを誰に、どこできいたか皆目わからないのだった。あるいは、列車の中ということもある。そうなると、駅前できいた……ということが変になってくるが、当日の列車客をすべてあたってみねばわからない。この捜査は不可能といってよかった。ここで早や三男喬の帰郷説に靄がかかった。

海堂警部は、いとの供述から、喬が京都府庁につとめ、満蒙開拓青少年義勇軍の募集に関する仕事をしていることをノートしていたので、京都府警に電話して、当人が府庁のその

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com